

「見える大学」と「見えざる大学」

——または学問論を装ったカントの党派性について——

渋谷治美 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード：カント、見えざる大学、二枚舌、フランス革命、理性宗教

【前書】 本小論は、筆者が1997年11月22日に上智大学にて開催された日本カント協会第22回学会におけるシンポジウム「カントの大学論・教育論」において、パネリストの一人として『見える大学』と『見えざる大学』と題して口頭発表した内容を素材として、議論を再構成したものである。同シンポジウムの他のパネリストは加藤泰史氏（南山大学）と武村泰男氏（三重大学学長 [当時]）であった。司会は量義治氏（東洋大学 [当時]）と平田俊博氏（山形大学）の二人が務めた。このとき筆者は事前に発表原稿を用意することができなかったため、今回改めて、発表の準備過程で書き留めたカード、学会要旨集に寄せたレジメ、当日会場で配布したテーゼを素材として、原稿を起こした。

はじめに

二十世紀も他の世紀に劣らず、人間とは何か、が疑問視され、問われる百年であった。最初の世界大戦、ヒトラーの登場とユダヤ人の大量殺戮、第二次世界大戦の大量破壊、核兵器の開発と使用、等々はもとより、二十世紀後半の日本に限定していても、一連のオウム真理教の狂信的組織犯罪、神戸の少年Aによる「さかきばら」事件、思い余った父親による長男バット殺人事件、毒入りカレーライス殺人事件、一連の「愛犬家」殺人事件があった。世紀が変わったとたん、ニューヨークの9.11 ツインタワー爆破テロが世界を震撼させた。日本で現在捜査が進行中の事件として、埼玉と島根の二人の女性による一連の睡眠薬殺害事件、大阪での若い母親による二人の乳幼児の置き去り致死事件、等々。——これらが象徴しているのは、共同態的な人間関係の希薄化、自己の喪失、生きる意味への疑問、等々を含みつつ、総じて「人間とは何か」という問い

への根本的疑問であるといっていだろう。このような、時間的にいって世界史的な、空間的にいって全地球規模的な危機的状況のなかで、大学はどのような存在意義をもつであろうか。それをカントの学問論と、それに基づいた道徳・宗教論と、それが秘めていた政治論の三つを絡めながら再検討してみたい¹⁾。

のちに『学部争い』（1798）を献呈することとなるCF.シュトイトリンに宛てた1793年5月4日付の手紙のなかで、カントが純粋哲学の課題として、私は何を認識することができるか（形而上学）、私は何をなすべきか（道徳）、私には何を望むことが許されているか（宗教）、の三つを挙げたうえで、最後にこれらを総括して、人間とは何か（人間学）、の四つの問いを記していることは周知のことである（訳書204-207頁、Aka429f.）。これをわれわれは第一に、カント自身の知的経歴をそのままの順序で回顧したものとして受けとめることができるであろうし（学問論）、さらに第二に、カントの大学・教育論の構想を示したものとして受けとめなおすことも許されると思われる（リベラル・アーツ論）。

カントの知的問題関心の対象領域の推移をたどってみると、確かに先の三つの問いの順番に対応する。若いころ自然科学を探究し、それを承けたかたちで批判期に入って、認識論の形をとりながら実質的には自我論・自己実現論を確立する。ついで、実践論・道徳論を高唱したのち、芸術論・目的論をはさんで最後に宗教論に至る。これらのテーマのすべてを合わせたものが、カントが年来自発的に講義してきた「人間学」の内容と一致しているのは当然である。カント自身はこれを出版するにあたって「生理学的な見地からの」人間学と対比させながら『実用的見地における人間学』

(1798)と形容したのであるが(訳書11頁、Aka.119)、多岐にわたる内容や多方面からの素材から判断して「(哲学的)総合人間学」と呼び換えることも十分に可能であろう。

第二の、四つの問いを大学・教育論の構想の提示として読み換えるとは、大学における研究と教育の柱が上記の第一から第三までの三つの問いであり、総じて第四の「人間とは何か」である、とカントは考えていたであろう、ということである。これらはいうまでもなく広義に解釈された<哲学する philosophieren>という知的態度に他ならない。重複を恐れずに具体的に内容を確認すると、人間が己れの何者であるかを知るために、規範とは何か、芸術とは何か、宗教とは何か、を学び知ることが必要不可欠であるだけでなく、それらの前提として、まず自然科学(および社会科学)を探究し身につけることが大学における研究と教育の使命に含まれる、ということである。そのような形で総合的に「人間とは何か」を探究する姿勢こそ、リベラル・アーツとしての教養教育の広義の目標に他ならない。CP.スノー以来理系と文系の人間の発想法の乖離が嘆かれているが²⁾、教養の復権にとってカントの大学・教育論は、いかにその啓蒙主義の限界が指摘されようとも、いま現在でも力強い理論的・思想的な後押しとなるであろう。

だが三つの学問分野(自然科学・認識論、倫理学、理性宗教論)の領域と内容がカントの生きた時代とわれわれが生きる現代とではおのずと乖離してきていることのほかに、他に問題が二つある。まず第一に、総じて「人間とは何か」という問いを支える根本態度として、カントの人間観がはたして現代にそのままの形で通用するか、という問題。第二に、大学教育におけるリベラル・アーツ(総合人間学)はこれまで現実に成功したことがあるだろうか、あるいは、カントの問題提起にしたがって新たに確立される可能性があるだろうか、という問題である。

第一の問題について。純粋道徳論をはじめとするカントの徹知的な人間観ははたして今日どのていど説得性があるのだろうか。というのも(ニーチェを待たずして「神は死んだ」ことをすでに確実に感知していた

はずの)カントは、いっさいの価値的なニヒリズムを究極の一点で食い止めるために、いわば背水の陣としてあのような二元論的な人間観を叫ばずにいらなかった、というのが実情ではなかったか³⁾。この見通しが正しいとすれば、今日の時点でわれわれは「人間とは何か」という問いの根底に、カントとは別の選択肢として自然科学等に依拠した一元論的な人間観を据えることができないであろうか。というのも、その方が現代の科学的知見に忠実であろうし、加えて、それによって人類がノモスの歪み・呪縛から脱却することができるかもしれないからである⁴⁾。

第二の問題について。カントは『たんなる理性の限界内の宗教』(1793)第三篇で、歴史的・現実的な「見える教会」に対して理念としての「見えざる教会」を対置した。これを継いで、哲学部と他の三学部を批判的・挑戦的に論じたのがカント最後の公刊となった『学部の争い』(1798)であった。実はカントにとって「見える教会」を代弁する神学部をはじめ三つの「上級学部」が「見える大学」に当たり、現在は「下級学部」と貶められている哲学部の本来の姿が、「見えざる教会」を学問的に根拠づける「見えざる大学」を意味していたのではないだろうか。すると上記したリベラル・アーツとしての総合人間学も、いわば「見えざる大学」における営みとして理念的に受け取るべきではないであろうか。ところで理念とは一面で現実的ではありつつも他面でけって完全に実現することのないもの、という性格をもっている。そのような壮大な学問構想の下に、いわばその手付けとしてカント自らが実践してきた教育の成果が『人間学』(1798)であったのではないか。——このように捉えてみると、『人間学』と『学部の争い』とがカントの生前刊行された最後の二つの著作であったことは、偶然の符合ではないと思われる。とはいえ、はたしてこのカントの構想・理念に基づいて、リベラル・アーツ(総合人間学)は現代に蘇るだろうか。

本小論はこのような問題意識の下に、カント最晩年の、命を賭けた論争的な仕掛けの真相(深層)を読み解いていくことを試みる。

1. 見える大学と見えざる大学

最初にカントが「見える教会」と「見えざる教会」についてどのように定義していたかを確認してみよう。

『宗教論』第三篇に次のようにある。まず、教会とは一般に「神の道徳的法則定立の下での倫理的公共体」である、という（訳書 134 頁、Aka101）。そのうち、「見える教会 *die sichtbare Kirche*」とは、「かの理想に合致するような全体への、人間たちの現実的な統合である」（同）。ここでいわれる「かの理想」とはうえにあつた「神の道徳的法則定立の下での倫理的公共体」を指す。この定義だけでは分かりづらいが、見える教会はすでにこの理想に到達しているというのでなく（先に確認したように、そもそも理想・理念は現実化しないものだ）、その理想を現世に普く実現しようとして歴史的・現実的に人びとを組織してきた現存の信仰団体のことを意味している（これまで見えてきた、いまも見える教会）。これに対して、その倫理的公共体が「可能な経験 *mögliche Erfahrung* の対象でない限りにおいては、見えざる教会 *die unsichtbare Kirche* と呼ばれる」（同）。——まず注意すべきは、いずれの教会もカントによれば、「神の道徳的法則定立の下での倫理的公共体」といわれている点である。一応「神の」といわれてはいるが、カントの重点はいうまでもなく「道徳的法則定立の下での」「倫理的」な公共体ということにある。つまりこれはカント自身の理性宗教を意味する。すると、「見える教会」といういい方で名指されている組織も、いったんはカトリック教会、プロテスタント教会を指していると受け取ってもかまわないだろうが、厳密に考えると、両教会とも実際には「道徳的法則定立の下での倫理的公共体」を目指した「現実的な統合」とはとてもいえないがゆえに「見える教会」とすらいうことができない、というようにも受けとめることができるであろう。対して「見えざる教会」は「可能な経験の対象でない限り」と定義されていることから、現実生活からすればこれが単なる理念であることは明瞭である。逆にいえば、事柄はもっぱら道徳的心術、内面的な意志規定の場面のみ関わるということである。

さて、ここからわれわれは、大学についても「見え

る大学 *die sichtbare Akademie*」と「見えざる大学 *die unsichtbare Akademie*」とを区別して論じることが許されないであろうか。大学は研究と教育とを両輪としつつ、真理の探究と現実的課題の解決（有効性）を二つの主任務とする。前者が「見えざる大学」の任務であり、後者が「見える大学」の任務である。ここに批判としての〈哲学する〉の立場を重ね合わせていうとすれば、有効性の見地に対する絶えざる批判・吟味・検討の立場が真理探究の見地である、ということができよう。さらに、誤解を招くことを承知のうえでいうとすれば、「見える大学」を実学に当て、「見えざる大学」を虚学に当てることもできるかもしれない。

この解釈を支持すると思われるカントの主張を見てみよう。法学部と哲学部（批判哲学の見地）の関係についてカントは次のようにいう。「法令なるものはまず第一に、或ることが正しいことを定めているものであるが、それなのに、法令それ自身がはたして正しいかどうかと問い直すことは、法律家たちによって不合理なりとしてきつと拒否されるに違いない」（『学部争い』訳書 327 頁、Aka25）。このように、カントにあつては、哲学は例えば法学との関係でいえばメタ法学の位置にあるといえる。お気づきのようにここはカントが書いた文章のなかでもとりわけ批判的な意味もっている。というのも、問われている関連した二つの事柄の布置関係に関するこうした思考法は、究極的には、意味（価値）を索める営みそれ自体にはたして意味（価値）があるか、という問いへと収斂するにちがいないからである（価値ニヒリズムの一步手前）。この問いの探究こそが「見えざる大学」としての哲学部の随一の任務であるだろう。

さてカントはうえの「見える教会」と「見えざる教会」の区分を承けて、『学部争い』において、神学部が「見える教会」で語られる「教会信仰」の代表者・代理・代弁者であることを確認する。「聖書・神学的学部は、まるでそのような歴史的なものの信仰（歴史事実としてのキリスト教）が宗教の本質に所属しているかのように強く見なしたうえで、同じくそのようなものを神的啓示として強く主張する」（訳書 346 頁、Aka37）。こうした位置づけから、われわれは神学部を「見える

大学」の筆頭学部として認定してもいいだろう。同じく上級学部に属する法学部、医学部も「見える大学」に配される（実学）。これに対して、「見えざる大学」として神学部的一步後ろに控える「哲学部」は「その学問的命題を思い通りに取り扱ってよしいので、学問の関心のみを配慮すべき学部」（訳書 319 頁、Aka.18）なのであって、いい換えれば「見えざる教会」を擁護して、理性宗教の見地から先の神学部を批判することを任務とするであろう（虚学）。俗（司法、法学者、王権、政治）は聖（見える教会、牧師）に俗的な強制を及ぼしつつこれを庇護するが、後者は前者に解釈・正当化（正統化）を反対給付する。この「見える」もの同士のもたれ合いの関係を背景として、聖（見える教会）は哲学部（見えざる大学）にも俗的な強制を及ぼそうとするが、後者は前者に断固として妥協することなく却って前者に解釈・批判を施すのだ、というのがカントの真意である。

以上から、「見える教会」と「見えざる教会」の二種の教会と、同じく「見える大学」と「見えざる大学」の二種の大学との、縦横斜めの都合六通りの関係⁵⁾を簡略ながら掴むことができたであろうか。

2. カントの総合人間学の構想と芸術

節を改めて、カントの学問論、大学論の構想を振りかえてみよう。

カントは、ベルリン大学からの招聘をはじめ数回の抜擢の機会をそのつど断りつつ、最後までケーニヒスベルク大学の哲学部にとどまった。その研究経歴は、まず自然科学から出発し、認識論（自己実現論）、道徳論、目的論（芸術論）、時事・政治・平和論、宗教論へと展開したが（先述の第一から第三の問い）、これを総じて、カントの営みは総合人間学の構築にあったということが出来るであろう（第四の問い）。これらを時系列的に階層化しさらにそれを構造化して示すと、次のようになるだろう。

a) まず、自然知・世界知（世間知）とその成りたちを解明する超越論的認識論がくる。——私のカント理解によれば、これは叡知的かつ感性的存在者たる人

間の（世界への）自己実現の第一歩を意味する⁶⁾。カントは後年、「観察」も一つの自己実現であるという意味のことを語っている⁷⁾。この学問的営為はいうまでもなく『純粹理性批判』に集約されている。つまり（常識的な評価とは隔たるかもしれないが）カントの第一批判は自己実現論を確立を目指した書物で（も）あったといえるのではないか。この、外界への知的関心、自己の知的外化は陶冶・教養 Bildung の核心を形成する。穏やかにいい換えれば、これが大学におけるリベラル・アーツの一面を構成するであろうし、次の b) の前提条件でもある。

b) これを承けて次に、二性格をあわせもった人間に固有な（狭義の）自己実現として**実用実践 Praxis** が位置づく。実用実践は幸福の原理、自愛の原理に基づく。——これはあの四つの問いに表立って登場していないし、カントもこれを主要課題とした著作をものしているわけでもないが、しかし『道徳形而上学の基礎づけ』（1785）であれ『実践理性批判』（1788）であれ『判断力批判』（1790）であれ、随所に実用実践が（純粹実践との対比で）語られていることは事実である⁸⁾。

だが a) b) の二つだけではなぜ人間の自己実現論として不十分だとカントは考えたのか。それは主に、実用実践においては具体的な目的が判然とするので、かえてこの実用実践自体の合目的性を支えるべき高次の（究極の）目的が眩まされるから、というところに理由があったはずだ。このことは、先の法学に関するカントの根底的な疑問の投げかけを思い起こせば明らかであろう（95頁）。つまり実用実践自体には善悪の基準は含まれておらず、そのままでは価値不可知論ないし価値相対主義に陥る、または安住してしまう、ということである。

c) そこでカントは、人間の、感性的性格に対する叡知的性格の優位、すなわち**純粹実践・純粹道徳**の実現という意味での（勝義の）自己実現＝意志の自律を「理性の事実」として確認する。こうして b) と c) が合してカントの道徳論が成り立つ。——だがこの純粹実践それ自体が理念として要請される、という事情を見逃してはならない。なぜなら、そこからカントの実践論は破綻しかねないからである⁹⁾。

d) 事柄の本質からすれば a)（自然認識）と c)（純粹実

践)のあいだに位置づけるのが相応しいと思われるが、著述の順番を尊重するとすれば、第四に**芸術**がくる¹⁰⁾。ここで最も重要な思想・概念は、いうまでもなく「目的なき合目的性 Zweckmäßigkeit ohne Zweck」(『判断力批判』訳書・上87頁、Aka226)である。——この概念とこの概念を背に負った**芸術**(活動・作品)は究極的には価値ニヒリズムの問題に接しているといえよう。なぜならば「(究極的な)目的なき」という事態そのものが価値ニヒリズムの湧出点を意味するからである。またこの概念に関連して、『人間学』の鍵概念である「趣味 Geschmack」「機知 Witz」も注目に値する¹¹⁾。

e) 学問体系論に入るかどうかは異論があるかもしれないが、大学論には必ず関係する話題として、カントにおいて次に**政治・平和論**がくる。とはいえこれらの論題が彼の道徳論、最高善論から発しており、そこへと帰着することを考えあわせると、やはり学問体系論のなかにも位置を占めると見なすべきであろう。この点については次節で詳しく見る。

f) 次に、シュトイトリン宛ての手紙でいえば第三の問いに当たる**宗教論**がくる。ひらたくいえば<要請としての理性宗教>論である¹²⁾。この点については次節と第四節で詳しく検討する。

g) 最後に、第一から第三までの問いを総括するべく、第四の問いを担う**人間学**が位置する。

以上が、シュトイトリン宛ての手紙を下敷きにして、カントの著作の出版年次を追いつつ、大雑把に捉えた彼の学問体系でありまた大学教育論である、とひとまず押さえておこう¹³⁾。

ここにカント研究に携わる者たちのうち『判断力批判』を重視する人々の、変わらぬ嘆きがある。それは、いま取りあげているカントの3+1の問いに、あろうことか『判断力批判』が位置づけられていない!という事実に対するものである。第三批判は1790年に出版されており、他方、手紙は1793年に書かれているから、第三批判があの一連の問いから外されているのはカントのうっかりだった、ということはいえなことを考えると、この嘆きはひとしおである。

さて私自身はあくまで『純粋理性批判』重視派であるが、**芸術**の合目的性に注目するようになって気づい

たことがある。それは意外な盲点ともいえるものであって、四つの問いのうち最後の総括的な「人間とは何か」という問いこそが**芸術論**を指すと解せないか、というものである。すなわち、第四の「人間とは何か」の課題を果たすのはひょっとして**純粋哲学**としての批判哲学でなくて**芸術**ではないか、穏やかにいい直せば、カントの総合人間学の体系なかで、諸科学からの知見、さまざまな人間関係論(倫理道徳も含む)、宗教論が語られたあとに、最後にもっとも人間的な営み・人間の究極的な営みとして**芸術**が位置づけられるのではないか、ということである¹⁴⁾。なぜかといえば、「人間とは何か」を描いているのが世の**芸術**であるから。超越論哲学は「人間とは何か」の形式(メタ)に関わるのに対して、**芸術**は(それぞれの**芸術**に固有な形式を踏まえつつ)その**質料**を形象化するからである¹⁵⁾。するとわれわれの問題意識からすると自ずと、大学教育論、リベラル・アーツの体系に「人間とは何か」の観点から**芸術**(とスポーツ)を位置づけることができるのではないか、という可能性が導かれるだろう。

ではカントは自分の人間論・大学論、とりわけその学問体系のうち個別契機としては最後の契機に当たる**理性宗教論**を世に浸透せしめるために、どういう手法を工夫したか。それは世にもまれなカント特有の巧妙な文章術であった。

3. 晩期カントの戦術的文章術

例の1793年5月4日付のCFシュトイトリン宛ての手紙における3+1の問いにおいて、『宗教論』(1793)は**純粋哲学**の領域における三つの課題のうち第三の課題(人間には何を望むことが許されているか)の解決を意味していると明言されている。だが、この書物をめぐっての真相はそれほど簡明・無邪気なものではなかったことは、いまや周知の事実である。カント自身が件の手紙のなかでそれを暗示するかのよう、うえの四つの課題の明言に続けて、自分の一連の**宗教論**をめぐる筆禍事件の経過説明(と愚痴)をシュトイトリンにむけて述べて立っている。そこには「[理性根拠に対して] 宮廷の空気がかもし出す暗雲から頭ごなしに破

門が下る」(訳書 205 頁、Aka.429) 可能性さえ示唆されている。ではカントはこうした危機に面してどのように対処したか。

まず、誰もが知っている有名な事実から確認する。

カントは晩年、フリードリヒ大王 (1712-86) の甥で大王の没後王位を継いだフリードリヒ・ヴィルヘルム二世 (1744-97) とその佞臣ヴェルナー (1732-1800) により、宗教に関するいっさいの講義と著述を禁止するという勅令 (1794) と前後三回におよぶ (検閲による) 印刷不許可の措置を被った。その詳しい事情はここでは述べないが¹⁰⁾、カントが心配した「頭ごなしの破門」が実際に下ったのである。ところがしかし、この禁止の勅令を受け取ったさいに彼が巧妙な二枚舌を使ったことについて、のちに『学部争い』の序文で彼自身が誇らしげに明かしている。彼はこのとき「国王陛下のきわめて忠実な臣民として」これを厳格に守ると恭しく返答したのだが、フリードリヒ・ヴィルヘルム二世が早々に亡くなると (1797)、うへの返答を振り返って、「私はこの表現をも慎重に選んだのであるが、それは私がこの宗教審理における私の判断の自由をいつまでも断念するのではなく、ただ国王陛下が生存しているかぎりには断念するためであった」と述べて (『学部争い』訳書 308 頁、Aka.10Ann)、宗教に関する発言と著述を堂々と再開する。こういわれてみればたしかにそういう意味だったのか、というほかないのであるが、死んだ国王やヴェルナーからすれば一杯喰わされた思いがしたことであろう (よくこれでカントは最後まで命と地位を全うできたものだ)¹¹⁾。

この言葉から垣間知ることができるように、とりわけ晩期のカントは、学問的な批判に見せかけた政治批判、時のノモス (宗教) を単に理論的に批判するとのみ見せかけたノモス変革 (王制から共和制へ) のアジェンションという、彼特有の命を賭けた、いわば捨て身の文章術・筆法を駆使していたのである。それをここで概括してみよう。まずいったんごく短く大局的に概括すれば、

(α) 最初に、理性主義 (自律の思想) から「見える教会」を学問的に批判する。

(β) ついでそれを通して、フランス革命による共和制を政治的に擁護する。

少し考えれば分かるように、(α) と (β) は通常相互に排除しあう関係にある。一言でいえば、学問、科学的批判はひたすら「真理」の追求を使命とするから、政治的には中立であるべきであって、したがって政治的な発言は禁欲するものだからである。ところがカントの場合、道徳を学問的に究明しはてた時点で (最高善の地上における実現)、発言は論理必然的に党派性を帯びたものに変貌するのだ (最高善の地上における実現を保証する前提条件としての、世界市民主義的共和制の確立)¹²⁾。そこでカントはここで必然的に (ことの赴くままに)、(α) を装った (β) を戦術として用いることとなった、強引な (力づくの) 改竄に基づいた二枚舌を駆使せざるをえなかった、ということであろう (次節 101 頁を参照)。

次に (α) と (β) の二つを具さに分節しよう。まず (α) は、

(i) 諸上級学部、とくに神学部との学問的テリトリー争いと見せかけて、実は言論出版の自由を主張する、

(ii) 言論出版の自由の主張と見せかけて、実はカント自身の理性宗教を高唱する、

という二重構造になっている。だが理性宗教の高唱とは周知のように、実質上それまでの教会信仰、啓示宗教の超克を意味し、ありていこいえば人間の主体的な道徳的自律 (= 自立) を意味した¹³⁾。とはいえここまでは (辛うじて) 学問的な批判の範囲内であった。

だがこれを踏み越えて、政治的な (党派的な) 主張である (β) のフランス革命擁護が隠された真意として続く。これはこれでまた、

(iii) 学問的な批判と見せかけて、実は戦争回避の主張であり、

(iv) 戦争回避の主張とは取りも直さずその時点においては、プロシア、オーストリア、ロシア、イギリスの王制の旧体制下にある列強がその軍事力によってフランス革命による共和制を包圍殲滅させて、フランスをもとのブルボン王朝による王制に戻すことへの批判、つまりフランス革命とその共和制の擁護を意味するのであるが、

(v) そこにはまたカントの最奥の意図として、世界市民主義を通して人類の道徳的改善を図り、究極的には地上における最高善の実現をめざす、という人類に課された無窮の歴史的使命＝究極の道徳的義務の提示があった、

という三重構造が読みとられる。

カントはさらにこうした文章術の応用篇として、本音と二枚舌を混交していつそうカムフラージュするという手法も開発した。『学部争い』にこうある。「[人間は] 彼の随意志 Willkür の形式的原理にしたがって国民が共同に立法的であるところの統治形式による以外の他の統治を……要求するべきでない」。ここでいう統治方式とは、共和制のことである。この政治思想はもちろんルソーの社会契約論における一般意志の考えを背景にもっているが、ともあれここでカントは、啓蒙期以降の近代（現代）政治は共和制のみが許される、と主張しているに等しい（本音）。彼の文章術が鮮やかなのは（あるいは、啞然とするのは）、これに続く議論の運びである。うえのように述べたあとカントは、①まずは革命を否定する（革命は手段として道徳的でないから）、②ついでプロシアの君主制を擁護する（啓蒙君主のおかげで共和主義の精神によって専制的に支配されているから）、と述べる。①は理由づけがその通りである（本音）からといって、そのまま主文も本音ととってよいだろうか。続いて、②の理由づけはむしろ大王へのカントの甘い勧誘（次悪の策としての啓蒙君主による専制政治）であって、したがって主文自体も相当に怪しい（二枚舌）。だが①を読む者は字面に騙されて、なるほどカントは隣国で進行中の革命に反対の立場なのか、と早とちりして安心するだろう。ところがはたしてカントは節を改めて、フランスで起きてい

る政治過程は「革命の現象ではない」と断定する！その理由は、フランス革命は（政治革命でなく）道徳的原理の進歩であって、したがって是認される、というものである。カントはつまり文章の前後の時間差を使って、実質的にフランス革命を賞賛しているわけである（以上、訳書 414-415 頁、Aka87f）²⁰。

このように見てくると一つ思い当たることがある。

『宗教論』第三篇の篇題であるが、それは「悪の原理に対する善の原理の勝利」というものであった。この篇題は一見、道徳的な善悪、ないし宗教的な神と悪魔の対立を意味するとみえるが、その裏に秘められた意味として、旧体制（王制）に対する共和制の勝利、フランス革命の擁護、国際関係における永遠平和を保障する体制の建設（比喩としての「神の国」の建設）²¹、という政治的な主張が横たわっていたのではないだろうか。この臆説を支持するかのごとく、カントは次のようにいう。「それゆえ徳の法則に従う公共体としての人類のうちに主権を樹立し、悪に対する勝利を主張してその支配下で世界に永遠の平和を保障する国が建設されるのは、人間の眼には見えないがたえず進行している善の原理の働きなのである」（訳書 165 頁、Aka124）。ここで「世界に永遠の平和を保障する国が建設される」という言葉によって示唆されているのが、ほかならぬフランス革命であろうと受けとるのが最も自然であろう。これと呼応するかのように、五年後に出版された『学部争い』に、気がついてみればフランス革命への共感の露骨な表明と取ることのできる箇所がある。そこでは、道徳的により善い状態への進歩（『宗教論』によれば「善の原理の勝利」）を希望させるのみならず、すでに（条件つきではあるが一定の範囲内で）そのような進歩であると断定されているのは、紛れもなくフランス革命なのである（訳書 411 頁、Aka85）。以上を図式的に二分割するならば、悪の原理＝見える教会＝現存の君主制 vs 善の原理＝見えない教会＝（世界）共和体制、となろう。カントが死守する「見えない大学」が後者を思想的・理論的に正当化する役割を担っていることは、改めて確認するまでもない²²。

こうした記述から、カント自身が自分の政治的立場が（たといそれが同じく自分自身の純粋道徳論とそこ

から導かれる理性宗教論から批判哲学的に自ずと帰結した態度であるというにしても) 現実の政治状況のなかでどういう意味をもつことになるか、当然ながら強く自覚していたことが分かる。ところで道徳とともに政治も宗教もノモスそのものである。したがってカントの立場は時のノモスとの鋭角的な対立を意味したし²⁸⁾、『学部争い』でいえば三つの上級学部、とりわけ神学部批判に直結していた。カントは上級学部を指して次のようにいう。「上級学部の階級は(学識の議場の右翼として)政府の規約を支持するが、それにもかかわらず、真理が問題である場合にはなくてはならぬごとき自由なる体制にあっては、どうしても野党(左翼)も存在しなくてはならず、これは哲学部の議席である」(訳書 341 頁、Aka.34f)。括弧のなかの「……右翼として」の表現には、「あなたがた上級学部はなるほど正当な *recht* 立場 *Seite* にお立ちですね、だから保守派=右翼 *rechte Seite* であるのも何ら不思議ではありません」という皮肉が込められているであろう。さらには、「けれどもあなたがたが正当でいられるのは、保守派としてもつばら時の権力の側にお立ちになっているからではないでしょうか」という批判が込められている可能性が高い。対してカントは自らの立場を堂々と「左翼」と宣言する。周知のように、右翼、左翼という政治的立場の対語はフランス革命から始まったこと、左翼とはジャコバン党を指したことを考えあわせると、この宣言は相当に迫力のあるものと読むことができよう²⁹⁾。

おそらく彼のこうした幾重にもカムフラージュされた政治的な立場は、プロシア政府のヴェルナー一派には明瞭に読みとられていたであろうし、当時としては天下周知の事柄であって、取り立てていまさら本小論で暴き立てるほどのものでなかったかもしれない。しかし晩期の一連のカントの著作を現代に即して読み解こうとするわれわれの立場からすると、こうしたカントの意図の多重構造はいま改めて明確に確認しておく必要があると思われる。

4. カントの理性宗教と聖書解釈

ここで論点を(α)の批判哲学からの「見える教会」への学問的批判、すなわち理性宗教の高唱に戻そう。

カントは純粋道徳の弁証論の解決として、「最高善の理念」を人間の究極目的に据えた(『実践理性批判』「弁証論」)。いい換えれば、人間は「最高善」の実現を一生にわたって「[どのような場面でも] そのつど同時に *jederzeit zugleich* 究極的な義務として目指す、ということである。そのさい「最高善」が実現するための諸前提条件として靈魂の不滅と積極的に考えられた自由の二つとならんで、神の現存在が要請された(これらの身分も理念である)。結局カントの道徳的信仰ないし理性宗教とは、この、「最高善」の実現の前提条件として要請された神の現存在を、道徳的義務の不可欠な一環として信仰する、ということに尽きる(義務としての信仰)。だから『宗教論』でも、「純粋な道徳的信仰が教会信仰に先立たなければならず」(訳書 156 頁、Aka.117)、「この純粋な道徳的信仰のみがあらゆる教会信仰のうちで本来の宗教の本質をなす」(訳書 149 頁、Aka.112)、といわれるのである。

その「最高善の理念」が実現する場として、カントがあくまでこの現世つまりこの地球上の歴史過程を考えていた点は重要である。「最高善」について『判断力批判』には「この世において自由によって可能となる最高善 *das höchste durch Freiheit mögliche Gut in der Welt*」という表現があったし(訳書・下 137 頁、Aka.450)、いま取りあげている『宗教論』には「地球上で可能な最高善 *das höchste auf Erden mögliche Gute*」とある(訳書 181 頁、Aka.136)。裏を返せば、カントは少なくとも最高善の概念によっては、キリスト教の意味での来世・天国はまったく考えていない³⁰⁾。この点も彼の自律の思想における見逃せない契機である。

ではこうした理性宗教論の文脈のなかでも、カントは前節でみたような戦術的文章術を駆使していたであろうか。答えはすでに確認したように然りであるが

(α)、筆禍事件を起こした『宗教論』における聖書解釈(改釈)を振り返って、『学部争い』のなかでカントは次のようにいう。まず「……理性は[聖書の]字句を文字通りに解釈する *auslegen* べきではないのであり、このことは解釈 *Interpretation* の最上の規則に完全に違反しているように見えるが、……これまで常に行われてきたことである」と開き直る(訳書 351 頁、Aka.41)³¹⁾。

「文字通りに解釈するべきではない」ということは、改訳 *umdeuten* することこそが正しいのだ、ということである（注 14）を再度見よ）。たしかに一例を挙げるならば、『宗教論』第三篇の或る箇所、カントは新約聖書『コリント人への第一の手紙』から「かくして神はすべてにおいてすべてとなる」（15-28）を引用したのち原注を振って、この聖書の言葉を次のように改訳していた。すなわち、これまで連続と続いてきた「見える教会」の歴史信仰は遅かれ早かれ滅び、純粋な道徳的宗教信仰へと移行する、これが「神はすべてにおいてすべてとなる」の本当の意味であると（訳書 181 頁、Aka135Ann）。同様に『学部争い』でも、『創世記』におけるアブラハムのイサク献呈（22 章）についてカントは（通常のキリスト教の立場からすると）とんでもない解釈を述べる。すなわち、イサクを殺させようとする声の主が「神ではありえない」ことをアブラハムは確信していたのであって（!）、というのもこの命令が道徳法則に反していることを彼は理性によって判断することができたからだ、という（訳書 383 頁、Aka63Ann）²⁰。

ここで『宗教論』第三篇にある一節（訳書 162 頁、Aka121）をパラフレイズしてみよう。カントは大略次のようにいう。——われわれが教会信仰から次第に解放されて、純粋な理性宗教がいっさいを支配するようになるのは、われわれの内なる自然的ならびに道徳的素質の必然的な結果であって、この道徳的素質は（キリスト教に限定されることなく）あらゆる宗教の基礎であると同時にその解釈者 *Auslegerin* である。——ここで解釈ということは何が意味されているかという、（現実のヨーロッパに戻っていえば）キリスト教の教会信仰を純粋な理性宗教の見地から解釈（改訳）することが権利保証されるべきだ、ということである。カントの危惧は、道徳を含めていっさいが神の無条件的な思召しに帰してしまうとすれば自律が雲散霧消してしまう、というところにある（パウロの予定説の批判）。つまり、「見える教会」のいいなりになるということは、「人間理性の死への跳躍 *saltum mortale*」を意味する、と（訳書 161 頁、Aka121）²⁰。また『宗教論』の別の箇所では、聖書にある神の創造を事実とすると、「自

由が他の外的原因によって生じた」こととなって、結局人間はもともと「自由でなかった」となってしまう、叡知者の自律という立場と矛盾する、ともいつている（訳書 190 頁以下、Aka142ff）。これら二か所からだけでも、カントにおいてはあくまで自律の観点から「見える教会」批判が貫徹されていることが確認される。

これと関連して、カントがイエスを自分の理性宗教論のなかでどのように位置づけていたかに触れておこう。『宗教論』第二篇で、イエスの役割は最高善を地上に実現するために代贖することにあつた、とカントはいう（訳書 79-81 頁、Aka60f）。だが他方、『宗教論』第三篇の原注で、イエスの代贖の物語の付録にあたるイエスの復活と彼の昇天は理性宗教に役立たせることはできない、ともいう（訳書 172 頁、Aka128Ann）。それぞれの理由をここで詳しくたどる余裕はないが、カントがイエスを評価する場合にも、あくまで道徳的信仰を教会信仰に優先させたことが分かるであろう。

ところで「見える教会」としての歴史的なキリスト教は啓示宗教だといわれていた（95 頁）。では「啓示」そのものについてカントはどう語っているであろうか。『学部争い』の或る箇所次のようにある。「直接的な神の啓示は超感性的な経験であるであろうが、これは不可能である」（訳書 360 頁、Aka47）。啓示は不可能と断定されているので、カントも思いきったことをいつているな、とまずは思われる。だが一步冷静になって、ここでカントは第一批判の「可能的経験」としては啓示は経験されえないという意味でいつているにすぎないと受けとめれば、それほど驚くべき発言でもない。というのは、可能的経験を超絶した体験としての啓示までも不可能だとはいつておらず、その意味での啓示体験については判断を保留しているからだ（「啓示は超感性的な経験である」）²⁰。だがしかし、啓示体験は「本来の宗教の本質をなす」（前出）ところの道徳的信仰のなかに然るべき位置はもたず、したがって非本来的宗教体験にすぎない、という裁定は覆らない。ということは、カトリックであれプロテスタントであれ啓示によって成り立っていると自称するキリスト教（「見える教会」）は、宗教としては非本来的な形態で

あると断言されていることになる。これこそがカントの理性宗教の真骨頂なのである。このように考え至ると、先のカントのいい分はやはり恐るべき断定だと断定せざるをえないだろう。

おわりに

最後に、残された論点などを未整理のまま書き記しておきたい。

(一) ではフランスでの共和主義革命に地上における最高善の実現の足がかりを期待しつつ、自分の理性宗教による啓蒙の全世界的な浸透を期待したカントは、人類の将来をひたすら楽天的に眺めていたのであろうか。『学部争い』第一部で、「いつの日にか……あとのものが先のものとなる」(『マルコによる福音書』10-31) という聖書の有名な言葉を使いながら、いずれ下級学部と上級学部の地位が逆転する日がくるだろうと示唆する(訳書 342 頁、Aka35)。だが他方同書で、上級学部と下級学部との合法的な争いについて、この「争いはけってして終了しえない」ともいう(訳書 339 頁、Aka33)。これは、見えざる大学の完全勝利は永遠にこないことを意味する。

さらにカントは次のようにも語っている。「ただしこのこと [人類のより善い状態への進歩] は、例えば(カンペルとブルーメンバッハに從えば) まだ人間の存在する以前に動物界と植物界だけを巻き込んだ自然変革の第一期の次にさらに第二期が [いずれ] やってきて、地球という舞台に他の被造物を登場させるために今度は人類にもかつてと同様のこと [種の死滅] を共演させる、等々のことがなければ、のことである」(『学部争い』訳書 417 頁、Aka89)。ここから第一に、カントが進化論を先取りするかのように、可能的経験の範囲内の未来現象として人類が他の動植物たちともどもに絶滅することはありうる(あっておかしくない)と見ていたことが分かる。第二にここでも、フランス革命を窒息させたら人類は滅びるかもしれないぞ、という脅しが含まれている。第三に、そうしたいくつかの意味合いが含まれていようと、カントが人類の未来について無条件の楽天主義を抱いていたのでなかった、ということもまたここから読みとることができる

であろう³⁰。

(二) 本小論で私はとくに次の四点で、従来のカント観に若干の修正を加えようと試みた。

(i) カントは文章術として自覚的に二枚舌、詭弁、強引な改釈を駆使したこと。

(ii) 彼の晩年の筆禍事件の裏には必ずカントのフランス共和主義革命への熱烈な賛美があったこと(密告、告げ口もあったはず)。

(iii) 彼は熱烈な共和主義者(世界市民主義)であって、それは彼の自律の思想、理性主義に淵源していること³⁰。

(iv) 総じてノモス批判という観点から、とくに晩年のカントの思想的展開、執筆活動を捉えることができること。

こうした視点がどのていどカント理解として受け入れられるかは今後の論争を俟ちたい。

(三) 本小論の「はじめに」で問いかけた課題が残っている。まず、リベラル・アーツとしての教養教育は成功するか、カントに從ってやれぼうまくいくか、という問いがあった。次に、現代の人類的な危機のなかで大学はまだ存在意義を有するか、という問いがあった。最初の問いについて私はいまのところ、カントと異なつて一元論的な人間観に基づいて「総合人間学」を構築することを通して、カントの精神に從つて「見えざる大学」をいっそう磨きあげる、という戦略の可能性を探っている。そこには疎外と価値ニヒリズムを承認しつつそれと共存する生き方として、芸術(とスポーツ)を抜本的に見直す作業が加わるであろう。これがそのまま第二の問いへのさしあたっての解答である。

(四) 振りかえてみると、本小論は私自身にとって奇妙な論調となっている。①カンティアーナの私が随所でカントの中核思想を批判する結果となった。②啓蒙主義者の私が啓蒙に批判的な視点を述べる形となった。③『純粹理性批判』中心主義の私が『判断力批判』中心主義に加担してしまった。④機械論的一元論者の私が合目的論の後押しをしてしまった。——これを要するに、今回の小論は全体として自己乖離的な論の運びとなっている、といえようか。

注

1) 本小論でのカントからの引用の典拠箇所は、まず訳書の頁を(訳書 324 頁)のように示し、ついで原典のアカデミー版の頁を(Aka12)のように示す。それぞれの訳書の出版社と訳者、およびアカデミー版の巻数は次の通り。ただし日本語としては訳書の通りとしなかったところもある。なお、引用文中の傍点は原文がどうであれすべて渋谷による強調である。

『たんなる理性の限界内の宗教』(1793、以下『宗教論』とも表記)：岩波書店版カント全集 10、北岡武司訳。アカデミー版第 6 巻

『学部之争い』(1798)：理想社版カント全集第十三巻『歴史哲学論集』所収、小倉志祥訳。アカデミー版第 7 巻

『判断力批判』(1790)：岩波書店版カント全集 8 (上)、9 (下)、牧野英二訳。アカデミー版第 5 巻

『実用的見地における人間学』(1798、以下『人間学』とも表記)：岩波書店版カント全集 15『人間学』所収、渋谷治美訳。アカデミー版第 7 巻

書簡：岩波書店版カント全集 22『書簡 II』木坂貴行・山本精一訳。アカデミー版第 11 巻

「魂の器官について」(1796)：岩波書店版カント全集 13『批判期論集』所収、谷田信一訳。アカデミー版第 12 巻

2) CP.スノー『二つの文化と科学革命』松井巻之助訳、みすず書房

3) 拙論「カントにおける価値のコペルニクス的転回——価値ニヒリズム回避の対スピノザ防衛戦略とその破綻——」(G.ペルトナー、渋谷治美編著『ニヒリズムとの対話——東京・ウィーン往復シンポジウム——』見洋書房 2005、所収)を参照。

4) 拙著『逆説のニヒリズム』花伝社、第一部を参照。

5) ①「見える教会」と「見えざる教会」の対照関係、②「見える大学」と「見えざる大学」の対照関係、③「見える教会」と「見える大学」の相互依存関係、④「見えざる教会」と「見えざる大学」の相互依存関係、⑤「見える教会」と「見えざる大学」の相互批判関係、⑥「見えざる教会」と「見える大学」の相互批判(否定)関係。本小論ではこのうち⑤がこののち焦点となる。

6) 拙論「カントの純粋統覚と物自体」(日本倫理学会編『倫理学年報 第 26 集』以文社 1977、所収)、「カントにおける(身心問題)の止揚——人間悟性の自己対象的性格の剔抉へ——」(日本倫理学会編『倫理学年報 第 36 集』慶應通信 1987、所収)、「カント「観念論論駁」再考——「定理」の主語の二重性を中心に——」(『埼玉大学紀要 教育学部第 58 巻第 2 号』2009.9、所収)を参

照。

7) 「魂の器官について」(1796)に次のような記述がある。「私の世界における人間としての自分の場所を規定しようとする場合」、「私は自分の身体を私の外にある他の物体に対する関係のうちで観察しなければならない」(訳書 232 頁、Aka35)。繰り返しになるが、カントが「私が世界における人間としての自分の場所を規定しようとする場合」というときには、外界への自己表現の第一歩を踏み出すということを意味すると理解することができる。これについては前注に示した拙論のうちとくに「カントにおける(身心問題)の止揚」を参照。

8) これについては拙論「カントの幸福批判論」(唯物論研究協会編『唯物論研究 第 5 号』汐文社 1981、所収)、「カントにおける価値の序列——〈実践理性の優位〉の新しい解釈のために——」(平田俊博、渋谷治美共編著『現代カント研究 3 実践哲学とその射程』見洋書房 1992、所収)を参照。

9) この点については注 3) に示した拙論のとくに第五節を再度参照されたい。

10) 第三批判の第二部では生物学をはじめとする合目的性の統制的理念が論じられている。この論題はいうまでもなく世界観、道徳論、宗教論に大いに密着するのだが、学問体系論、大学教育論という観点からすると現在ではカント当時ほどアクチュアルではないと思われるので、ここでは措く。カントにおける「目的論」については、佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代——目的論の新たな可能性を求めて——』岩波書店、を参照。

11) このうち「機知」はほとんど第一批判における「構想力 *Einbildungskraft*」と同義であり、後者はまた「想像力」と訳すこともできる。

12) 実は *c)* を媒介せずとも人間は宗教を要請(要求)する。これについては拙著『逆説のニヒリズム』花伝社、第二部を参照。

13) カントの学問体系については、『人間学』訳者解説五『人間学』の構想の総合性と体系性を参照。

14) もちろん『人間学』が全部芸術論だといっているわけではない。ところでこうした把握の試みは、解釈 *auslegen* というよりも改釈 *umdeuten* (新しい解釈を施す) というべき着眼である。ところでカントの理性宗教の視点からのキリスト教解釈については次節以降に触れるが、私見によればこれは完全に解釈ならぬ改釈、それも相当に強引な改釈である。

15) カントを離れることになるが、芸術に加えてスポーツも同様に評価されているのではないかと。

16) 『人間学』訳者解説二「カントをめぐる言論弾圧について」を

参照。

17) 実はカントは(すでに若いころから)二枚舌を縦横無尽に活用していたことについては、『人間学』訳者解説四「カントの二枚舌ないし三枚舌について」を参照。

18) 科学的な分析から帰結する真理をこの世に実現するために、次いで必然的に現実政治的な主張を展開する、という事情に限って言えば、カントとマルクスは通じ合うといえる。

19) 『啓示』についてカントが何とっているかについては、のちの101頁を見よ。

20) カントはナポレオンの出現を(道徳的原理の実現という視点から)どう評価したであろうか。『学部争い』は1798年に出版されたが、すでにナポレオンは1796-97年にイタリア遠征を果たし輝かしい戦功を挙げている(マレンゴの戦い)。したがってカントはこれについてこの時点で知っていたことは確実である。だがのちに1799年にブリュメール17日のクーデタを成功させ、1804年に皇帝の位に就いたことについてはどうか。1804年に亡くなるまでのカントは、隣国の共和主義革命がナポレオンを軸としてさらに急速に変質していった過程をどう捉えていたであろうか(そのごナポレオンが1812年にモスクワ遠征に失敗し、間をへだてずして没落したことについてカントが知る由もなかったことはいうまでもないとして)。

21) 『永久平和のために』(1795): 岩波書店版カント全集14『歴史哲学論集』所収、遠山義孝訳、アカデミー版第8巻、を参照。

22) 『学部争い』の或る注に、彼がフランス革命に共感しているゆえにヴェルナー一派から反政府的と中傷された事実があったことを匂わす記述がある。「革命の舞台から何百マイルも遠ざかっている地方[ケーニヒスベルク]において」「中傷的誹謗者たちは……居酒屋談義を、国家を危険にさらす革命熱だ、ジャコバン主義だ、暴徒だといいたてようとした」(訳書413頁、Aka86Arm)。カントの居酒屋談義(おそらく自宅か友人宅での食事の席での政治論)が(スパイを通じてか)ヴェルナー一派にゆがんで伝わった可能性がある。なお同年に出版された『人間学』序文にこれに呼応するような記述があるが、それについては『人間学』訳者解説四「カントの二枚舌ないし三枚舌について」を参照。

23) カントとノモスの関係は他面からも触れなければ事柄に公平といえない。それは、カントの道徳思想の中核概念にあたる「自律」という語の原語が *Autonomie* であって、これは語の構成からすると「自動ノモス」と訳することができるだけでなく、実際カントの自律とは叡知界における主権的で必然的な法則である道徳法則(ノモス)を自らの意志の第一規定根拠とする自発性(自動=

必然)を意味するからである。ここからも、カントの道徳説、叡知的人間観自体が近代市民社会のノモスの内面化ではないか、というカントに批判的な評価も成り立ちうるであろう。人間は自愛の原理を断固として拒否したうえで、あたかも自律であるかのよう道徳法則を守ることができる、というわけである。これについてはとくにM.フーコーの、カントを含めた近代の主体化は隷従化=臣下化を意味する、という鋭い批判を参照(『性の歴史I 知の意志』渡辺章訳、新潮社、79頁)。

24) 先には自分をジャコバン党だと中傷する輩がいてけしからんと憤っていたが(再度注22を見よ)、ここでは自分はジャコバン党ですと名乗っているようなものである。

25) ただし『純粋理性批判』ではこの点がまだ明確になっていなかったことについては、注3)に掲げた拙論の注5)を参照。

26) もちろんカントはここで『聖書』の文言の解釈(改釈)についてこのようにいっているのであるが、このことはカントの文言についても当てはまるだろう。ことに彼が戦術的文筆術として二枚舌を潜めている箇所についてはそうである。——もちろんこういっただけでは、本小論におけるカント改釈の正当化のためである。

27) イサク献呈について詳しくは注4)に掲げた拙著『逆説のニヒリズム』第二部172-173頁を参照。

28) 「見える教会」を改釈する権利の主張を「見える大学」を改釈する権利へと記号学的に読み換えるとすれば、権力・反権力を問わず研究と教育をめぐるイデオロギー対立、現実の科学政策と教育制度を、人間理性と想像力(および創造力)と感性の *salomortale* (死への跳躍)でないかどうかという視点から批判すること、となる。たといこの批判が啓蒙主義的な理性主義からの批判という限界を帯びたものであり、かつそれ自体が一つのイデオロギーではないかという批判がありうるとしても。

29) ここで否定されているのは「直接的な」啓示であって、したがって「間接的な」啓示については保留されているとする解釈もありうるであろうが、的外れであろう。「間接的な啓示」とは何を意味するのだろうか。

30) 価値ニヒリズムのニュアンスを匂わすかのように、カントが『学部争い』で「愚人主義 *Abkriismus* の仮説」を紹介するなかでシシュフォスの神話に言及していること(訳書407頁、Aka82)、そこでも彼は二枚舌を使っている節があることについては、注3)に掲げた拙論の「おわりに」を参照。

31) 『啓蒙とは何か』(1784)においてカントは大いにフリードリヒ大王を賛美しているというのが世の定説となっているが、これがまったくの誤読であって、カントは大王の生前から同書で(二

枚舌を縦横に駆使しながら幾重にも) 彼を厳しく批判していた事実については、拙論「カントと愛国心批判」(日本カント協会編『日本カント研究8 カントと心の哲学』理想社2007、所収) 第二節を読みたい。

(2010年9月30日提出)

(2010年10月15日受理)